

2014年7月24日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 自由自在の人生

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「仏説観普賢菩薩行法経」

### 1. 仏説観普賢菩薩行法経の位置

#### (1) 法華三部経

無量義経・妙法蓮華経・仏説観普賢菩薩行法経を、法華三部経と言います。

無量義経は法華経を開くお経であるとして「開経」、仏説観普賢菩薩行法経は、法華経を結ぶお経であるとして「結経」と呼ばれています。

#### (2) 仏説観普賢菩薩行法経

このお経は、《妙法蓮華経》の最後の《普賢菩薩勸発品第二十八》のあとを受けて、さらに普賢菩薩を主役として説かれたもので、徹底した懺悔（さんげ）の法をお説きになっているために、一名《懺悔経》と呼ばれています。（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.225）

註：懺悔は、一般には「ざんげ」と読みますが、仏教では通常「さんげ」と読みます。

### 2. 「懺悔」の意味

#### (1) 通常の懺悔

「懺悔」の通常の意味は、「過去に犯した罪状や悪事を自ら悔い改め、告白すること」（『角川国語中辞典』）であり、この経典でもその意味で使われているところがあります。

この場合の懺悔の言葉は「私が、悪うございました」「ご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした」などになると思います。

#### (2) この経典における懺悔

この経典では、自分が到達しようとする理想像と現在の自分をひき比べて、その隔たりを自覚し、懺悔することが説かれています。

この場合の懺悔の言葉は「私は、まだまだ、至らない人間でございます」「私は、まだまだ、未熟でございます」などになると思います。

### 3. 題名の意味

題名の〈普賢菩薩を観ずる行法〉というのは、普賢菩薩の〈行〉の徳をしっかりとみつめることによって、その精神に自分の心が一致するようになり、心が仏道に定まり、ついに普賢菩薩とおなじような〈行〉ができるようになる、そのような修行の方法……という意味です。（同p.225～226）

#### 4. 普賢菩薩を観ずる行法

##### (1) 普賢菩薩の身を見る

この品には〈普賢菩薩の身を見る〉ということがくりかえしくりかえし説かれています。それはつまり、自分の心が普賢菩薩の精神にピタリと一致するというにほかなりません。

(同p. 226)

「普賢菩薩の身を見る」のは、普賢菩薩を手本とし目標として修業するためです。

普賢菩薩は法華経の実践を象徴する菩薩ですから、普賢菩薩のすがたを通して法華経の実践のしかたを学び、これを手本として自ら実践するのです。

##### (2) 懺悔する

まだそのような境地にたっていないならば、修業のいたらなさを反省・懺悔する必要があるというのです。(同p. 226)

##### (3) 仏身を見る

また、〈普賢菩薩の身を見る〉ことができても、それで満足せず、こんどは〈仏身を見る〉よう努力しなければならぬことが説かれています。仏さまのみ心と一致することができてこそ、修業の完成があるからです。(同p. 226)

普賢菩薩と自分をひき比べて反省・懺悔していた段階から、仏さまと自分をひき比べて反省・懺悔する段階に入るのです。仏さまを目標として修業するのが、仏教本来のありかたです。

#### 4. 懺悔の極致

##### (1) 懺悔の極致は実相をおもうこと

それゆえに、〈懺悔の極致は諸法実相をおもうことである〉と説かれています。(同p. 226)

妙法蓮華経方便品に、「わたし(釈迦牟尼世尊)が究めた真理(諸法実相)というものは、仏と仏のあいだでしか理解することのできないものである」(同p. 32)とあります。

仏さまの境地を目指すことは、諸法実相を究めようということですから、「懺悔の極致は諸法実相をおもうこと」になるわけです。

##### (2) 第一義空

諸法実相とは第一義空(だいいちぎくう)ということ。(同p. 226~227)

「諸法実相」とは、ものごとのありのままのすがたです。すべてのものごとは縁起の法によって生じ、移り変わり、滅していきます。そこには実体というものがありません。それが「空」です。これが最高の法(第一義)なので「第一義空」というのです。

第一義空を悟れば、いつでも自由自在に、しかも適切に判断し、行動できるようになります。

### (3) 六情根を懺悔する

六情根(ろくじょうこん)を懺悔したうえで、このこと(諸法実相)を一心に思惟し、徹底することができれば、すなわち仏さまのみ心と一致することができたわけで、もろもろの罪はあたかも霜露(そうろ)のごとく、その大智慧の光によって消滅すると説かれているのです。(同p.227)

六情根とは、眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根の六根です。六根は情的にはたらくので、六情根と言ったのだと思われます。

六情根の満足を得たいという思いに引きずられて、智慧を失い、真理から外れた行いをくり返してしまうのが迷っているすがたです。心の自由も、行動の自由も失っている状態です。

そこで、六情根に引きずられて過ちを繰り返してきた自分を反省・懺悔して、再びこのような過ちを繰り返さないように気をつけますと誓います。

その上で諸法実相を思惟し徹底する修業に入ります。

こうして、自分の心が仏さまのみ心と一致するようになれば、六情根に引きずられることは無くなり、心と行動の自由自在を取り戻すことができるのです。

## 5. 在家信者の懺悔の実践

最後に仏さまは在家のもの、特に心ある人びとに、現実的な懺悔の実践を教えてくださいました。  
(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p.227～228)

註：「在家」とは、自分の住まいを持ち、自分で生計を立てながら、社会の一員として生活している人をいいます。

「出家」とは、家を捨てて、修行者の仲間に入り、食事・衣服・今夜の寝所・病気の時の医薬などを、在家の人々からいただきながら、修業に励み、教えを人々に伝え歩く人のことです。

## 6. 第一の懺悔

第一の懺悔として、次の五項目が上げられています。

- ・三宝を敬う
- ・出家僧などの信仰修業の邪魔をしない
- ・六念の法(仏・法・僧・戒・施・天)を修する
- ・大乘の教えを保つひとをたいせつにする
- ・いつも〈第一義空(諸法実相)〉ということに心をとどめている

これらは、仏教を人生の指針として生きる在家の人の、あるべき姿勢を説いたものと考えられます。

註：「三宝」とは、仏宝・法宝・僧宝の三つの宝です。

註：「六念の法」とは、仏宝・法宝・僧宝を念じ、戒(仏さまからいただいた戒め)を念じ、施(人々に布施をすること、特に教えを伝えるという法の布施をすること)を念じ、天(煩惱の迷いを除き尽くした境地)を念じることです。

## 7. 第二の懺悔

第二の懺悔は「父母に孝養をつくし、先生や、目上の人を尊敬する」ことです。

自分を育ててくださる方々、自分を支えてくださる方々を大切に思い、感謝の心で接することを教えているのだと考えられます。

自分が、今、ここに、こうしていられることに意義を見出した人は、自然に、このような心になると思います。

## 8. 第三の懺悔

第三の懺悔は、「正法にもとづいて国を治め、まちがった考えによって、人民を邪道へ曲がらせないようにすること」です。

具体的には、「政治家として調和のとれた正しい政治を行なうこと」「組織などのリーダーとして正しく人びとを導くこと」などです。

これは、リーダーの立場にある人の心がけるべき戒めであると受けとることができます。

## 9. 第四の懺悔

第四の懺悔は「月の六度の精進日には、自分の治めている土地（影響力の及ぶ処）に布告をだし、支配力（影響力）の及ぶかぎりの処で、あらゆるものの生命を尊重するようによびかける」ことが勧められています。

昔のインドで、鬼神が人を追って命を奪ったり病や悪い事をする悪日が考えられていました。この日には、身を慎み、沐浴・断食をして過ごす風習が行われていました。

この風習が仏教にも受け入れられて「月の六度の精進日」となりました。

この日には、心身の清浄をたもち、八つの戒めを守り、善事を行なうことが勧められています。

八つの戒めの第一が「あらゆるものの生命を尊重する」ことです。

精進日は、8日、14日、15日、23日、29日、30日の6日間です。

### 【参考】

仏教は、その土地で行われている風習や宗教と容易に結びつく性質があります。

仏教は主義主張ではなく、人間の生き方、人間関係のありかたを説く普遍的な教えです。あらゆる人間に通じる当たり前の教えです。

仏教は、また、あらゆるものを生かすことを目指す教えでもあります。

本来の仏教には神がありませんから、如何なる神々ともぶつかることはありません。

こうしたことから、仏教は、そこにある風習も宗教も神々も、正しく生かそうとする方向で働くのです。

## 10. 第五の懺悔

### (1) 仏教の総まとめ

〈但當に深く因果を信じ、一実の道を信じ、仏は滅したまわずと知るべし〉とのおことば、これこそ、仏教全体を総まとめた、じつに尊い指導といわなければなりません。

(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 228～229)

### (2) 深く因果を信じる

〈因果〉とは、原因・結果の法則であり、〈因縁の法門〉とも〈縁起の法〉ともいい、仏教の骨格をなす教えです。(同p. 229)

「縁起の法」とは、ビジネス縁起観においては「原因・条件・結果・影響の原理」です。

「深く因果を信じる」とは、私たちが認識するこの世のものごとは、すべて「原因・条件・結果・影響の原理」によって動いていることを信じ、この原理を活用して、人々と共に幸せになる道を歩む努力をすることです。

原因・条件・結果・影響の原理を使いこなすことによって、自由自在の人生を歩むことができるようになります。

### (3) 一実の道を信じる

〈一実の道〉とは、ただひとつの真実の道、仏になる道、菩薩道のことです。したがって仏の教えにはさまざまな違いがあるようでも、すべてが、あらゆる衆生を〈仏の境地にみちびく〉というただ一つの真実につらぬかれているということです。これが〈一実の道〉です。(同p. 229)

「一実の道を信じる」とは、自分も人々も仏になる道を歩むのが、本当の生き方であることを信じ、そのように生きる努力をすることです。

仏になれば、人びとを、自由自在に正しい道に導くことができます。

### (4) 仏は滅したまわずと知る

〈仏は滅したまわずと知る〉とは、いうまでもなく、久遠実成の本仏は不生不滅であり、われわれはその久遠本仏に生かされているのだという真実を知ることです。(同p. 229)

自分も、人びとも、本仏の久遠実成の生命に生かされていることを知って、本仏に生かされているとおりに生きる努力をすることです。

本仏は私たちが自由自在に個性を発揮し、自己実現をすることを望んでいます。

### (5) 大金言

この三つの信が心のなかに確立すれば、いかなる人もほんとうに自由自在の心境にたっすることが出来ます。それこそがほんとうの救いなのであります。

まことにこれは、法華三部経の掉尾を飾るにふさわしい大金言なのであります。(同p. 229～230)